

『ドラキュラ』における知の暴力¹⁾

金 井 嘉 彦^{*}

- I はじめに
- II 奇妙なドラキュラ
- III 規定され、決められていくドラキュラ
- IV 眼差しによる支配と暴力
- V 見る側の不完全性
- VI 書くことの理性と力
- VII 結語

I はじめに

『ドラキュラ』(*Dracula*)は1897年、帝国主義の最盛期にある19世紀末に、アイルランド出身のブラム・ストーカー (Bram Stoker) によって書かれた怪奇小説である。物語はジョナサンという人物がトランシルヴァニアへと向かうところから始まる。用件はロンドンのとある土地取得に関する法的手続きを済ませることで、その向かった先にドラキュラがいる。その用件が済んでも彼は帰してもらえず、英語およびイギリスについてドラキュラに教えるという名目のもとに、城に幽閉される。出口を求めて城の内部を探検する間にドラキュラが普通の人間ではない、不気味な存在であることをジョナサンは知っていく。彼が無事ドラキュラ城から脱出できたのか、それともドラキュラの仲間の餌食となったのかが知らされない間に、場面はイギリスへと移り、物語はジョナサンの婚約者ミーナ、その友人のルーシー、そして彼女を取り巻く男性の話へと変わる。原因不明の病気にかかり、衰弱していくルーシーのことでオランダから呼ばれた医師ヴァン・ヘ

【一橋法学】(一橋大学大学院法学研究科)第3巻第3号2004年11月 ISSN 1347-0388

※ 一橋大学大学院法学研究科教授

1) 本論は2003年10月11日に行われた公開講座で「知と理性の裏側」という題名のもとに話したことを大幅に書き換えたものである。

ルシグは、それが吸血鬼の仕業であることを次第に確信していく。彼は、考えられるすべての策を講じるが²⁾、これも結局は効をなさないまま、ルーシーは死んでしまう。しかし、実は死んだのではなく、ドラキュラに血を吸われることで、不死者 (“Un-Dead”)³⁾となってしまった彼女は、夜な夜な墓から抜け出しては、子供たちを襲う。それがルーシーの仕業であることに気づいたヴァン・ヘルシグは、ルーシーの婚約者アーサー、ルーシーに結婚を申し込んでいた医師でヴァン・ヘルシグをオランダから呼んだ医師シューワード、同じくルーシーに結婚を申し込んでいたアメリカ人モリスを説得して、ルーシーの墓をあばき、彼女の心臓に杭を打ち、首を落とし、彼女を清め、真の死へと導く。これを契機としてドラキュラが存在を信じるようになった一団に、ドラキュラ城を無事脱出できたものの、そこでの恐ろしい経験のために脳炎を発症しイギリスに戻ったジョナサンとその妻となったミーナも加わり、一致団結して、ロンドンのいくつかの場所に設けられたドラキュラのアジトを探し出し、彼を追いつめていく。そして、ついには故国トランシルヴァニアまで逃げるドラキュラを追走し、彼をしとめる。

おなじみのドラキュラの物語であるが、この小説には奇妙な点が多く見受けられる。大人何人分かの力を持ち、オオカミやネズミといった動物を自由に操ることができ、霧を起すなど自然現象も操作することができ、コウモリや霧に姿を変えることのできるドラキュラは、超自然的な存在で不気味ではあるが、意外と紳士的で、ロンドンに移るにも法的な手続きを踏み、被害者の同意がなければその家にも入れない。ドラキュラは、自分の持っている力のすべてを悪事に費やす存在ではない。また悪と言っても、大したことをしているわけではない。それは、例えば、彼が苦勞してロンドンにまで行って結局何をしたのかを考えるとよく分

-
- 2) その一つが輸血である。これによりルーシーは、婚約者を含む自分のまわりにいるすべての男性から、不死者になってもいない生前に「血をもらう」ことになる。このことは、夢遊病同様ルーシーが生前も死後も不死者と同じような行動をしていることを示す。当時はまだ血液型のことも分かっていない時代で、輸血は非常に危険なものであった。ルーシーはドラキュラに血を吸われたからではなく、不適切な輸血により死んだと考えることもできる。
 - 3) ルーマニア語で vampire を表す *nosferatu* (16:222) という語がテキストの中では同義語的に用いられる。この語については、*OED* には “Clan of the Hidden” とある。ギリシア語の *nostos* (disease) + *fero* (carry) との説明もある。

かる。我々読者に知らされるのは、彼がルーシーの「死」に関与したらしいということだけである。ルーシーのほかにも、同様に襲われ「死んだ」人は報告されない。ミーナも同様の運命に陥りかけるが、結局のところは助かる。このようにして、終わってみれば犠牲者は一人だけなのである。それも、血液型のことも考えずに行われた輸血のせいであると考えたとドラキュラのせいであるのかは確かではない。ジョナサンは、ドラキュラが「何百万という人がうごめく中で、血の渴きを飽くまで満たすだろう。そしてそこで新たに悪魔を生み出し、そいつらは水紋のように止むことなく広がっていき、弱い者達を犠牲にするのだ」(4:74)と⁴⁾、自らが手配した土地取得の手続きを悔やむが、実際のドラキュラの活動は、奇妙なほどに限られた人の輪の中で起こり、彼は活躍というほどの活躍をしないままトランシルヴァニアに戻り、死んでいく。また、自らの名前を小説の題名にしているにもかかわらず、ドラキュラは、小説が進むにつれて奇妙なほどに自らの存在感を奪われていくように見える。その果てに、ドラキュラはあまりにあっけない最後を迎える。それは、超自然的な力を持った不可思議な悪との戦いで予想されるような、壮絶な戦いの果ての死というよりは、運命によって消えていく者のはかない死のように見える。本論は、この奇妙なテキストがドラキュラをどのように見て、書き、知り、その過程でドラキュラに対しどのようなことを行っているかについての考察である。

II 奇妙なドラキュラ

ドラキュラは、主に4つの要素を持つ怪物として描かれるが、それはなによりも、最初にドラキュラに遭遇するジョナサンによって、ドラキュラが変わっている・奇妙な存在であると描かれることから始まる。「この場所やそこにあるものはすべて奇妙で、不安にならずにはいられない。ここから無事に帰ればよいと思う。というよりも来なければよかったと思う。ここでの奇妙な夜中心の生活が

4) 引用は、Bram Stoker, *Dracula: Complete, Authoritative Text with Biographical, Historical, and Cultural Contexts, Critical History, and Essays from Contemporary Critical Perspectives*, ed. John Paul Riquelme (New York: Palgrave, 2002) からとし、章数とページ数をコロンで区切って () 内に示す。

こたえているのかもしれないが、それで終わりとなるのならよいのだけれども。」(2:49)と記すジョナサンは、まずは場所が奇妙であると感じることから始め、続いてドラキュラと場合によっては朝まで話をして過ごす夜の生活も奇妙であることに触れ、そしてついには、「伯爵がものを食べたり飲んだりするところを見たことがないのは奇妙なことだ。彼はとても変わっているに違いない」(2:50)とドラキュラ自体が変わっている・奇妙であると認識するに至る。こうして一旦変わっている・奇妙であると感じられると、その言葉が彼の認識の中で広がっていき、この感覚が高じたとき、ドラキュラは「怪物」と規定される。

この変わっている・奇妙であるという性質は、空間的にも表される。ジョナサンは、イギリスを出て東へ向う途中で「西洋を離れ、東洋に入っていく」(1:27)と感じるが、彼がドラキュラと会う場所は、西がすでに西ではないところ、つまり東方なのである。そこは当然のことながらジョナサンにとって「奇妙な」言葉をしゃべり、「奇妙な」服を着て、「奇妙な」食べ物を食べ、「奇妙な」風習のある場所である。ジョナサンがさかんにメモを取ろうとするのはそのためである。西方からやってきた者に「変わった」場所と映るであろうことは、「我々がいるのはトランシルヴァニアなのだ。トランシルヴァニアは、イギリスではない。我々のやり方は君たちのやり方とは違い、君にしてみれば変わっていると思えることもたくさんあるだろう。というより、君が私にすでに話してくれた君が経験したことからすれば、どれほど変わったことが起こり得るかについて君にもくらは分かっているおいでのようだ。」(2:46)と言うドラキュラにも分かっている。変わっている・奇妙であると形容されるドラキュラが、変わっている東方にいることは、偶然ではない。東方にいるからドラキュラは変わっている・奇妙であると感じられるのであって、同じことを別の形で表現しているにすぎない。

ドラキュラが変わっている・奇妙であるのは、闇の存在であるからでもある。動き回るのは夜の間だけで、光の当たる昼間は棺桶の中にこもり不在であるドラキュラは、闇をその属性とする存在である⁵⁾。闇は光とコントラストをなし、これによって縁取られることによってこの小説はドラマティックな性質を与えられ

5) 昼間登場する箇所が第2章に1カ所だけある。

ていく。ドラキュラが光の周縁にいる存在であることが、最初の犠牲者となったルーシーとの接点となる。両者の間にはつながりがないように見えて実は密接なつながりがある。一つには、ルーシーは、闇を属性に持つドラキュラにとって攻撃対象となっても不思議でない、光をその中に持ち合わせている。ルーシーは、ルチアといった名前同様「光」を意味するラテン語 *lux* を源とする名前なのである。しかも彼女の名は、ルーシー・ウェスターナといい、「西の光」を意味する⁶⁾。ドラキュラにとって逆の属性を持つのと同時に、ルーシーは、ドラキュラを引き寄せる要素も持ち合わせている。それはルーシーが子供の頃から持っていた病気、夢遊病である。夢遊病は、彼女がドラキュラ同様夜に動き回る闇の要素を持ち合わせていたことを示す。ルーシーが夢遊病を接点としてドラキュラと出会うことはそのことをよく示すとともに、ルーシーはそもそもドラキュラと同じ不死者になる運命であったことを示している。

ドラキュラの持つ、変わっている・奇妙である性質は狂気とも重なる。そのことは、シューワードの病院に収容されているレンフィールドという狂人が、ドラキュラのことをご主人様と呼ぶことから分かる。このレンフィールドという狂人は、ハエやクモや鳥を食べることでその命を自分の中に取り込み、その取り込んだ命の分だけ自らの命を長らえることができると信じるマニア “a zoophagous maniac” であるが、血を吸いそれによって命を長らえる吸血鬼ドラキュラの子型的な役割を果たしている。

Ⅲ 規定され、決められていくドラキュラ

変わっている・奇妙であることを起点として、ドラキュラは4つの属性、すなわち、変わっていて、東方にいて、闇と狂気存在であるとされる訳だが、この変わっている・奇妙であるということはどのようなことを意味するのであろうか。このことを考える上で手がかりとなるのは、ジョナサンから見てドラキュラが変わっていたり、奇妙であるとすれば、ドラキュラの側から見てもジョナサンは変わっていたり、奇妙であるはずであるが、問題になるのは、常にジョナサンの側

6) ドラキュラのルーシーに対する攻撃は、西が西でなくなる東から西へ、しかもその中心と目されていたイギリスへ打って出るドラキュラの動きと平行する。

から見て変わっている／奇妙である点で、ドラキュラの側から見て変わっている・奇妙である点ではないところであろう。ここには問題がいくつか含まれている。

まず第一に問題となるのは、変わっている・奇妙であると問題にすることが、一方にだけ許されて他方には許されないことで、そこに不均衡があることである。不均衡ということは、両者が平等の立場ではないことを意味する。この不均衡と不平等が生まれるのは、変わっているとかが奇妙であるという言葉が向けられる方向が、このテキストでは自動的に、あるいは先験的に決まっているからである。方向は、テキストの内部で自由に論議されて決められるのではなく、テキストの外部から持ち込まれる。それは、眼差しと語りの形式によって、持ち込まれる。

『ドラキュラ』という小説は、日記、手記、手紙、新聞記事等ドラキュラに結果的に関係あると思えるものを寄せ集め、再構成することでできている。序文によれば、それらは「それらを書いた人の視点から知りうる範囲で書かれたもので」、「不必要なことはすべて省かれている」という。それを「読めばどういう順になっているかが分かる」ように並び替えたという。また、ドラキュラに関係した記録は、「過去のことを述べた部分に記憶違いが入ることはない。選ばれているすべての記録は、ことが起こったときのものだからである」(26)という。序文に書かれたこのような説明と実際の構成は、いかにテキストが正確で真実の記述であるかを主張するもので、不思議なことを語る物語ではよく使われるものであるが、これを読むだけでも、ドラキュラが、ドラキュラを退治する側からしか描かれないということが分かる。ドラキュラは、常に誰かに代わって表象されている。彼は語られる対象ではあっても自らを語る言葉を、構造的に、持てない。彼の名前を題名としている小説ではあるが、彼は主人公ではない。主人公は、彼を退治することを語る一団である。

ドラキュラが退治する側からしか描かれないことと関連して重要なことは、それが一度だけ起こることなのではなく、何度か繰り返し起こっているということである。つまりは、まずは退治する側の眼差しによって変わっていて奇妙である存在と規定されたドラキュラが、退治する側の語る行為によってそのようなものとして固定化されていくのである。しかもその語りは、序文に書かれていたよう

に、再構成されている。その過程で、固定化されたドラキュラ像は、動かしがたい、消しがたいものへと変えられていくのである。ドラキュラという存在を見て、そのようなものであると「知った」人が、その体験を言葉にすることでそのようなものとして固定化し、それを、他の登場人物が読むことでドラキュラをそのようなものだと「知り」、語り手がまとめて本の形にする段階でそのような「知」は再度固定化され、そうしてまとめられたものを読んだ読者が、ドラキュラを再びそのようなものとして「知る」ことになるのである。最初は一登場人物がドラキュラという存在を見て感じたことが、何重かの固定化の過程を経て動かしようのないものに変えられてしまった後の姿を、我々読者は実に目にしていくのである。

IV 眼差しによる支配と暴力

ドラキュラがどのようなものであるかを規定・決定する、変わっている・奇妙であるという言葉は、単純な形容詞なのではなく、価値判断を伴っている。これらの言葉が使われるのは、その言葉を当てはめられる対象に、見る側のシステムに即さない部分があることを示す。ということは、変わっている・奇妙であるという言葉は何ものかに向けて発するというその行為は、見る側の世界観を構成するシステムに合わないものに対し異義を唱え、排除したり、抑え込むことでその存在を消し去ろうとする遂行的な行為であるということになる。変わっている・奇妙であると見ざるを得ない、それ以外のものとして見ることを不可能にするその眼差しのなかには、その対象を支配しようとする欲望がある。無色透明のように見えるがゆえに無害であると考えられている眼差しには、見る対象を見る側のシステムにとって無害であるように排除・抑圧しようとして振るう力、力を振るわれる無力な見られる側からすれば暴力が含まれている。

このことをよく示してくれるのは、仕事を既に終えたジョナサンに城に残って欲しい旨をドラキュラが説明する場面であろう。

もし私がロンドンを歩き、言葉が発したら、私のことを異邦人だと分からない人はいないだろう。それでは私には不十分なのだ。この地では私は貴族で、

ポイエールである。下々の人は私のことを知り、私は領主である。しかし、異国での異邦人ということになると、それは何ものでもない人間である。人は私のことを知らず、知らないということは好まないということだ。もし私が他のイギリス人と同じになり、そのために私のことを見ても誰も足を止めることなく、私が話す言葉を聞いても話を止めて「異邦人だ!」と言ったりしないなら、よしとしよう。私は長い間支配者であったので、いつも支配者でいたいのだ。というか、少なくともほかの誰かが私の支配者となることはさせない。君は独りでエクセターの我が友ピーター・ホーキンスの代理人として私のところに来てくれた。しばらくの間私のところに滞在し、話をすることで英語のイントネーションを学べるようにしてくれることと思う。話していて私が間違ったときには、どんなに細かいことでも言ってもらいたい。(2:45)

ほかの人と違って変 'strange' な人間が、異邦人 'stranger' であることをドラキュラはよく理解している。彼が望むのは、'strange' な人、'stranger' であることを止めることである。'stranger' とはまた人々に知られない人間で、それは好まれないこと、無価値な人間であることであるとドラキュラは言う。またそれは「ほかの誰かが自分の支配者となること」に通ずるとも述べている。変わっている・奇妙であるということは、自らを自分以外の何ものかの支配下に置くことなのである。

V 見る側の不完全性

変わっている・奇妙であるという言葉を使ってある対象を表さざるを得ないとき、そのように見る側のシステムは不完全であることを図らずも露呈していく。変わっている・奇妙であると感じるのは、見る側のシステムにその対象がそもそも欠けていて、それをあり得る・あってもおかしくないこととして受けとめる余地がないことを示すからである。対象をあり得る・あってもおかしくないこととして受けとめることのできるシステムというものも当然想定できるはずであるが、それに比して今その対象を受け入れることができずに、変わっている・奇妙であるとしか見ることができないシステムは、その対象を見るのに不適切であるとい

うことになる。

見る側のシステムの不完全性は、このテキストでは見る側が狂っている可能性があるという形で示される⁷⁾。例えば、ドラキュラ城に幽閉されたジョナサンが、城を訪れてきたティガニー人たちに助けを求める場面は、次のように書かれている。「私は窓のところに走り寄り、二人に向かって叫んだ。彼等は私の方を間抜けな顔をして見上げ、指差した。そのときティガニー人の頭が出てきて、彼等が窓辺を指差しているのを見て、何事かを言うと、二人は大笑いした」(4:66)。助けられるどころか、指を指され笑われてしまうのは、城主のもとを訪れたティガニー人にすれば、幽閉されたジョナサンはそれなりに理由があってそうされていると見えたからであろう。彼等が言った「何事か」の内容は、ここでは明らかにされないが、彼等がそれを聞いて笑ったことから考えると、「やつは頭がおかしい」といった類のことに違いない。自分の不幸を嘆くジョナサンには想像できなかったであろうが、彼等の目にはジョナサンは座敷牢に閉じこめられた狂人のように見えた可能性がある。実際ジョナサンは、ドラキュラ城にいるときから、頭がおかしくなりそうだと書いている。また、ドラキュラ城をなんとか脱出したものの、脳炎にかかって入院していた彼が後に「私にはそれ〔ドラキュラ城で経験したこと〕が本当のことなのか、狂人の夢なのか分かりません。ご存じのように私は脳炎にかかりましたが、それは気が狂うということなのです」(9:122-23)と自ら言っているところを見ても、彼が狂っていた可能性は、間違いなくある。

狂気を内に秘めていたのは、ジョナサンだけではない。他の登場人物も同様である。ルーシーが、狂気的一种である夢遊病にかかっていたことについてはすでに触れた。ルーシーがドラキュラと最初に邂逅するのは、狂人にご主人様と呼ばれる狂気存在ドラキュラと相通ずるものがあつたからである。医者シュー

7) 狂気と正気は、『ドラキュラ』というテキストの中で重要なコントラストをなすが、コントラストを示しながらも一方では崩れていく。興味深いことにそのコントラストは、ドラキュラが怪物である度合いが増すと強まっていく。彼の狂気が増すと、そのまわりの狂気も増すのである。正気の中に狂気が潜んでいることは空間的にも表現される。一同が集まり、ドラキュラを倒す計画を練っている、ドクター・シューワードの病院のすぐ隣りの敷地にドラキュラが居を構えていたという事実は、この二つの隣接性をよく示していると言える。

ワードにも不気味な側面がある。彼は自分の精神病院に収容されているレンフィールドに興味を持ち、正当な理由さえあれば解剖して脳がどうなっているかを見たい、そしてそのことで名を挙げたいと考える、マッド・サイエンティストの側面を持っている。「大義名分さえあれば」(6:92)、彼は狂気と正気の境目を容易に越えていた⁸⁾。

ヴァン・ヘルシングは、この小説に出てくる登場人物たちが正気ではないと考えようとする、その最有力候補になる。ルーシーの葬式で彼が涙を流して泣くと同時に狂ったように笑う彼の行動は、シューワードを当惑させる。その上に、彼が、自分たちが好きであったルーシーの墓をあばき、その首を落とす計画を告げるとき、彼の最もよき理解者であり、医者でもあるシューワードさえも、彼が狂っていることを疑わない。「考えたくもないことだが、ヴァン・ヘルシング狂っているなんて発見は、不死者の存在と同じくらいの驚きだ。いずれにせよ、注意深く観察することにしよう。」(15:212) ヴァン・ヘルシング自身「人は皆多かれ少なかれ頭がおかしいのだ」(10:135) と言って憚らない。

クインシー・モリスというアメリカ人も怪しい人物である。アーサーやシューワードの友人ということになっているが、どのような経緯でここにいるのかも、どうして大金を持っているかも不明である。突然姿を現したり、皆がドラキュラ征伐の計画を練っているときに、一人で外にふらふらと行き、外から皆がいる部屋めがけて鉄砲を撃ち込んでくる人物は、敵ドラキュラの分身ではないかと思わせる。ドラキュラとの最後の戦いで唯一人彼が命を落としたのも、彼がドラキュラの仲間あるいは分身で、ドラキュラが死んだから彼も死んだと思えなくもない。彼には、ドラキュラと戦う一団の中で日記や手記を残す権利が与えられていないのも不思議である。

彼等はまた明らかに違法行為を行っている。彼等は、ルーシーの家に押し入り、ルーシーの墓をあばき、死体に杭を打ち、首を落とすほかに、死亡診断書を偽造し、最後はドラキュラを殺してしまう一団で、その彼等を正気であるとは言い切れない。

8) 彼は、「I sometimes think we must be all mad and that we shall wake to sanity in strait-waistcoats.」(20:276) とも書いている。

こうしてドラキュラを倒す側の狂気という形で、見る側のシステムの不適切さが図らずも示されることになるが、この不適切さは、その対象を見るときに想定することのできる多数の使用可能なシステムの中で、今使われているシステムがどうして用いられているのかを問題にし、結局はそのシステムが用いられたことの恣意性を露わにする。

VI 書くことの理性と力

日記や手記を書いている人物が狂っているとすれば、すべては信じられなくなる。そうでなくてもこのテキストには信じさせようというそぶりと信じさせまいとするそぶりが同居している。例えばジョナサンは自分が経験したことを正確に語ると言いながら、一方で、眠っていたのに違いないと言ってしまう。例えば、5月5日付の日記では、ドラキュラ城へ到着したときのことを「眠っていたに違いない。というのも、はっきりと目が覚めていたなら、これほど見事な城に近づいていることに、気がつかないはずがないからである」(2:39)と書いている。第3章でも同じ言葉を繰り返す(3:61)。ミーナも、「しかし私は眠り込んでしまったに違いありません。というのも、夢を見たことを除くと、朝ジョナサンが起こしてくれるまでのことは何一つ覚えていないからです」(19:261)と同じ言葉を使って、信憑性に疑問を持たせるようなことを自ら言ってしまう⁹⁾。

このことから、見る側のシステムが不完全で恣意的なものであるならば、書かれていることはどのようにして正当化されるかという問題が提起される。この問題に対してこの小説が用意している答えは、書くことである。

この小説は、書くということに対する脅迫観念的な執着を持っている。登場人物たちの書く日記や手記が何よりもそのことを示す。というのも、登場人物たちが日記や手記を書くのに無理があるのに、それでもなお日記や手記を書こうとしているからである。日記・手記は基本的に、ある程度の時間の経過を前提とした記録の形式である。その経過した時間によって、当人にとって重要と思えることと重要ではないことをまずは大別し、後者を書く対象から外し、前者について、

9) 類例としては、“I think I must have been mad for the time.” (3:51) がある。

考察を交えながら書く形式である。ということは、この形式は、過去のことを記録するには適しているが、現在を描くには適していない形式ということになる。ところがこの小説においては、起こったことを、それがその日の終わりを迎えたときにもなお重要な意味を持っているかどうか分からないうちに、すぐに書くとする。『ドラキュラ』においては、当初は自然に見え、機能していたこの形式も、次第に起こったことと書く行為との間の時間が短くなり、まさに序文に書かれているような「そのときそのとき」の記録、現在の記録となっていくとき、無理が生じてくる。それが最もよく示されるのは、シューワードの家に「光の一团」が集まり¹⁰⁾、皆がドラキュラという存在を認識し始め、その存在を信じるようになるまでの期間である。皆が集まり、ただ話し合えばすむものを、わざわざ個々人が記録を取ってそれを見せ合おうとするのである。これは考えてみると不思議なことで、滑稽ですらある。

どの日記や手記の書き手も、単に書くだけでなく、正確に書くことを心がける。ジョナサンが第4章で「どんな細かいことでも順序正しく書かなくてはならない」(4:69)と書くと、妻となったミーナも『『エクセター・ニュース』の記者をしているジョナサンの友達は、インタヴューでは記憶力がすべてで——たとえ後で手直しをしなくてはならないにしても、話されたすべての言葉を正確に書き留められなくてはならない、と話したという。……一言一句正確に記録してみましょう。」(14:191-92)と書いて、ヴァン・ヘルシングと会ったときの様子を記録する。11章ではシューワードも「すべてを正確に書き留めておこう」(11:148)と書く。ルーシーに至っては、体が衰弱し、書く力もほとんど残っていない死に際に、「たとえ書いている間に命を落とそうとも書かなくてはならない」との使命感のもとで、「今晚起こったことの正確な記録」(11:156)を残そうとする。

この小説の登場人物たちが、事細やかに、かつ正確に書こうと思ひ、起こったことを時間を置かずにかくしようとしているのは、一つには目の前で起こっている対

10) Christopher Craft, "Kiss Me with Those Red Lips : Gender and Inversion in Bram Stoker's *Dracula*," in *Bram Stoker's Dracula*, ed. Harold Bloom (Philadelphia : Chelsea House, 2003), p. 42.

象があまりに奇妙なことであるからでもあるが、それよりも自分が狂気に陥らないためである。書くということ、つまり言葉を持つことが正気であることであり、正気であることの証明なのである。ジョナサンは、ドラキュラ城で幽閉され気が狂いそうになりながら、シェイクスピアがハムレットに「私の手帳を！早く、私の手帳を！／これこそ書き記すのにふさわしい。」と言わせたときの真意を理解したというが、それが分かるのも、「頭のネジがはずれ、脳をだめにする衝撃を受けながら、心の安らぎを求めてこの日記に向かっているからだ。正確に記する習慣が、私の心を静めるのに役に立つに違いない。」と説明している(3:60)。これとは逆に、ジョナサンが、既に引用した箇所で狂っていることと同義だとした脳炎にかかっている間、彼は日記も手記も手紙も書いていない。ミーナは「愛しいジョナサンは病気だった。だから書けなかったのね」(8:117)(強調筆者)と納得する。書けないこと、書かないことは狂っていることであり、書くことは、とりもなおさず正気なのである。書くこと、つまりは言葉を持つこと、表象することは理性の印なのである。書くことの権限を与えられるということ、つまりは書く側となること、そのことが持つ何のものにも勝る絶大な力をここで我々は目にする。

VI 結語

変わっている・奇妙であると描かれることを手がかりにした考察で以下の3点が明らかになった。1) 代理表象され、表象する力を自らは持たない・持てないドラキュラは、表象する側の眼差しによって、規定され、そのように書かれることで、そのようなものであるように決定されるという形で、その眼差しが持っている支配の欲望を受けていた。2) 表象する側の眼差しは、狂気を内に秘めた不完全なものであり、また恣意的なものであった。3) 表象する側の眼差しと書くという行為は、その意味では本来的に正当化されない性質のものであるが、逆説的にあるいは循環論法的に、書くこと、言葉を持つことがその正当性の根拠となっていた。

ここで確認されるのは、表象する側の特権的な地位と力である。表象する側が、その眼差しと書く行為を通じて、表象される対象をとあるものと規定し、決定し

ていく際の根拠は、不完全で恣意的なものであるが、それは表象する側にあることによってオーバールールされるのである。眼差しを持つこと、書くこと、表象することの持つ力と、それを当てはめられる側からすれば、正当に振るわれるのではない力という意味での暴力を、小説『ドラキュラ』は意図せず、自らの中に書き込んでいる。このような力が振るわれる中で、ドラキュラが「知られて」いくテキストの中で我々目にするのは、おなじみの「知」という名の支配／暴力、「知」のオリエンタリズムである¹¹⁾。

11) オリエンタリズムについては、Edward Said, *Orientalism* (New York : Random House, 1979) および、*Culture and Imperialism* (London : Virgo, 1994) 参照。